

日本語学習者と英語学習者の留学動機：留学は第二言語学習と自己形成にどう影響するのか

著者	原田 登美
雑誌名	言語と文化
巻	14
ページ	179-201
発行年	2010-03-15
URL	http://doi.org/10.14990/00000499

日本語学習者と英語学習者の留学動機

—留学は第二言語学習と自己形成にどう影響するのか—

原 田 登 美

和文要旨

本研究の目的は、留学は留学する人にとって第二言語学習と自己形成にどのように影響するのかというテーマを背景に、第一に日本語学習者と英語学習者の留学の動機の相違点とその理由について考察することである。考察の方法として民族言語的バイタリティーの概念を用い、日本語をバイタリティーの小さい言語、英語を大きい言語という視点から、両者を因子分析によりそれぞれ8つの留学動機の因子を抽出した。その上で、Gardner & Lambert (1959, 1972) に拠り、両者の特性をそれぞれ統合的、道具的動機と特徴づけた。また、その相違は地域性と国際性に由来するものと捉えた。

本研究の第二の目的はDeci & Ryanの自己決定理論の枠組みに基づいて、日英語学習者の留学経験が学習者の自己形成にどのように反映しているのかを考察することである。考察の結果、留学経験は日英語共に自己決定度の高まりをもたらし、第二言語学習と自己形成に効果的に影響することが指摘された。

第一と第二の研究目的と考察を通じて、日英語学習者の留学動機のコンセプトには、日本語が「日本語による対人関係と文化的意味空間の形成の志向性」、英語が「国際的コミュニケーション能力養成の志向性」という相違があることが認められた。

キーワード：留学動機、民族言語的バイタリティー、統合的動機、道具的動機、自己決定理論

英文要旨

Studying Abroad: Differences in Motivation and Self-Development between Japanese Language Learners and English Language Learners

This study has two purposes for researching how studying abroad affects L2 acquisition as well as the self-development of students. Firstly, this study aims to consider the differences in motivation for studying abroad between Japanese language learners and English language learners, and the reasons for the

differences in motivation.

The concepts of ethnolinguistic vitality and factor analysis are used to analyze the motivations and reasons. As a result, the differences in motivation are characterized by what Gardner and Lambert term “Integrative Orientation” for Japanese language learners due to the limited region, and “Instrumental Orientation” for English language learners due to an international and global community. Second, this study aims to consider how the experience of studying abroad after a half-year period reflects in both language and self-development in the frame of Self-Determination Theory. The experience produced high self-determination and positive effects for L2 acquisition and self-development of the students.

Through these two considerations, I can find different postures: the posture for developing communicative competence in Japanese and the formation of “cultural meaning space” for students of Japanese, and the posture for developing international communicative competence for students of English.

key words : motivation for studying abroad, ethnolinguistic vitality, integrative orientation, instrumental orientation, Self. Determination Theory

1. 問題の所在と研究目的

21世紀になって急速に普及したインターネットの出現と地球規模の人々の移動により、今や世界の共通語としての英語学習の必要性は高まるばかりである。英語は国際語、世界共通語、地球語、World Englishes¹⁾(Francis & Ryan, 1998)、普遍語²⁾(水村, 2008)などと呼ばれ、21世紀の現代では、政治外交、ビジネス、学問の分野などで共通のコミュニケーション言語として使用されている。それゆえ、非英語母語話者にとっての英語習得は生活上の重要な課題となり、英語習得を目指して各地の英語圏へ留学する人々の増加は世界的な現象となっている。

一方、日本語は地域語、現地語と呼ばれる一国家規模の使用言語であり、学習者も英語の10億人と比較すると約298万人(国際交流基金2007年の調査)という弱小言語である。日本語は弱小言語としての民族言語であるがゆえに、一つには21世紀の世界にあって第二言語教育としての日本語教育の学習意義は何かを問われ、二つには英語との関係において、日本が世界への発信力を高めるために、「21世紀日本の構想」³⁾に提唱された「国際共通語」としての英語教育を、国語教育の重要性の中でいかに位置づけて学校教育を行うのか、その教育政策の中で、日本語と日本文化をいかに存続し次の世代に継承していくのか、といった課題に直面している。

上記のような英語と日本語の世界的位置づけと問題の所在を背景に、本研究の目的は、「日本留学⁴⁾」は留学する人にとって、第2言語としての日本語学習と自己形成にどのように影響するのか」について、日本語と英語を例にとりながら比較し考察することにある。

具体的には、本論では、第一には、A) 日本語と英語（以下、両者を併記する場合には日英語とする）学習者の留学の動機はどのように似てどのように異なるのか、及びその相違は何によるのかを考察すること、第二には、B) Deci & Ryan (1985, 1991) の自己決定理論 (Self Determination Theory, 以下SDTと略す) の枠組みにおいて、日英語学習者の留学経験は動機づけのプロセスモデルにどのように反映しているのかを考察することにある。

上記の研究目的を果たす理論的概念として、最初に、ある状況である言語を学習することの持つ意味を考える際に有用な社会心理学的概念（八島, 2004, 64) の、Giles, Bourhis & Taylor (1977, 308-309) の「民族言語的バイタリティー⁵⁾」を引用する。

「民族言語的バイタリティー」は、1) 言語の社会的地位、2) その言語話者の分布、3) 制度上の支援体制の三要素により規定される。八島 (2004, 64) によれば、「一般に民族言語的バイタリティーの強い外国語の方が、実用的価値が高い傾向にあり学習意欲がおこりやすい。逆に実用的価値が低い言語をわざわざ学習しようという人は、統合的動機が強い可能性が高く、その言語への純粋な興味を反映していると言える」。日英語を比較すると、英語が日本語より「民族言語的バイタリティー」が圧倒的に強い根拠として、英語の公用語話者数・母語話者数がそれぞれ14億と3.5億、英語が世界80カ国に及び公用語として使用されているのに対して、日本語の公用語話者数・母語話者数はそれぞれ1.2億と1.2億、公用語としての使用は日本1カ国であることが挙げられる。さらに、英語は国連の公用語であり、学習者数も公的学校機関で学ぶ人数を含め英語の10億人に対し日本語は約298万人であることである。

本論では、世界の中で見た場合の「民族言語的バイタリティー」の強い言語の英語とそれが弱い言語の日本語について、両者の留学動機と留学経験の相違を調査し比較する。

2. 先行研究

日本語学習の動機づけについては、倉八 (1991, 1992)、縫部・狩野・伊藤 (1995)、成田 (1998)、高岸 (2000)、郭・大北 (2001)、李受香 (2003)、中野 (2003)、守谷 (2004, 2005)、河先 (2006)、原田 (2008)、などがある。いずれも国内外の諸地域を対象に、「なぜ日本語を学習するのか、学習の動機は何か、について」分析を行っている。

先行研究の中で、本論と同様に直接に日英語の学習動機を比較した研究については、管見する限り、次の中野 (2003) の論文しか見当たらなかった。本論のような日英語を共に対象とする動機づけ研究はこれまで希少である。従って、本論の研究意義の一つは希少な研究への取り組みということが先ず挙げられよう。

以下に中野 (2003) の論文を概観するにあたり、本論の理論的支柱となる「統合的オ

リエンテーション (integrative orientation)」と「道具的オリエンテーション⁶⁾ (instrumental orientation)」について言及し、以後、先行研究についても、この観点から整理していくことにする。

Gardner&Lambert(1959,1972)は、学習者が目標言語の第二言語文化やその言語を話す人々に対して好意的、友好的な感情を持つこと、さらには第二言語文化の一員になりたいという気持ちを持つことが言語学習の意欲を高め結果的に第二言語能力を伸ばすとして、このような動機を「統合的オリエンテーション (integrative orientation)」と呼び、それに対して、就職や進学、職業的な成功など実利的な学習目的を指す動機を「道具的オリエンテーション (instrumental orientation)」と呼んで、両者を対比した。Lambert (1963) は ‘integrative orientation’、と ‘instrumental orientation’ の語義を次のように説明している。

His (=Learner's) motivation to learn is thought to be determined by his attitudes and by his orientation toward learning a second language. The orientation is “instrumental” in form if the purposes of language study reflect the more utilitarian value of linguistic achievement, such as getting ahead in one's occupation, and is “integrative” if the student is oriented to learn more about the other cultural community as if he desired to become a potential member of the group. (Gardner 1991, 47)

ここでいうオリエンテーション (orientation) とは、言語学習に対する目的、理由、志向の意味であり、先行研究の用語 (縫部・狩野・伊藤 (1995), 成田 (1998), 郭・大北 (2001)) にも倣い、本論においてもこれ以降、「統合的オリエンテーション (integrative orientation)」と「道具的オリエンテーション (instrumental orientation)」をそれぞれ「統合的志向」、「道具的志向」と呼ぶことにする。

中野 (2003) は韓国の大学生の日英語の学習動機を比較調査している。中野の研究を統合的・道具的志向の観点から整理すると、中野の「親和志向」と「言語学習志向」は「統合的志向」の範疇となり、日英語共に肯定的であったという結果である。また、「社会的誘発」は道具的志向の範疇となり、日本語は否定的で英語では肯定的だという分析結果であった。中野の研究では、最終的に、英語が韓国では社会的に力の強い外国語であり、日本語は社会的に力の弱い外国語であることが、韓国における日英語の学習動機の違いであると示されている。

次頁表1は、先行研究について、「留学動機」を「統合的志向・道具的志向」の観点からまとめたものである。

表1 A. 先行研究に見る「留学動機」と「統合的志向・道具的志向」

研究発表者	対象学生	調査結果	「留学動機」と「統合的志向・道具的志向」
縫部・狩野・伊藤 (1995)	ニュージーランドの大学生（ビクトリア大学）	6 因子（日本理解、国際意識、学習への興味、統合的志向、誘発的志向、道具的志向）を抽出	統合的志向は、来日経験がある方が高く、学習期間が長い方が高い。「道具的志向」は学習期間が長い方が高い。
高岸 (2000)	日本に1年以内の短期留学をしている米国人の学生	留学経験が動機の強さや種類（内発的動機と外発的動機）に変化をもたらすことが明らかになった。	留学時には「親に勧められた、日本語がやさしそうだから」という「誘発的動機」だけだったが、留学を通して「日本に住みたい」「日本で働きたい」のように日本語を将来の仕事に結びつけたいという目的を持った「統合的動機」と「道具的動機」が現れた。
李 (2003)	JSL環境の日本における韓国人学習者とJFL環境の韓国における韓国人学習者	JFLの学習者はJSLの学習者より動機づけが高いが、自己評定はJSLの方が高い。	JFLの学習者はJSLの学習者より動機づけが高いが学習が継続しない。JFLの学習者はJSLの学習者に比べて、自己効力感を感じにくい。日本語学習期間と、統合的志向・道具的志向の間に有意な相関関係は見られなかった。

以上、先行研究について概観してきたが、上述の先行研究のいずれもが日本語のみを考察対象とし、日英語を比較対照した研究ではない。その結果、日本留学とJFL及びJSLに求められる日本語学習の意義概念が、世界的視野の中で英語と比較対照されてはいない。従って、その分、日本語のみからの狭く限定的な視野に陥っていることは否めない。

次表2は、先行研究を「留学動機と自己決定性」の観点からまとめたものである。先行研究では、「留学動機」と「自己決定性」に関して、日本語学習者からの一言語のみについて言及していたものを、本論では、日英語の留学半年後の学習動機を二言語学習者の比較の上で論じている。

表2 B. 先行研究に見る「留学動機」と「自己決定性」

研究発表者	対象学生	調査結果	「留学動機」と「自己決定性」
守谷 (2005)	中国人研修生41名	学習意欲の背景には、来日に際しての自発性・自己決定性が動機や学習目標を特徴づけるという事実がある。その背景に来日前の「他者」との接触経験が大きく関与している。	自発性・自己決定性をもって来日した場合に、研修生は多様な学習動機や学習目標を持ち、自己の中で日本語学習が明確に意義づけられる。

河先 (2006)	韓国・中国からの私費留学生 9 名	留学した後、学習開始前と実施後では、実施後に自己決定の高いものに変化した。	学習開始後、動機はより内発的、自己決定の程度の高いものになり、肯定的な自己概念と結びつく傾向がある。
原田 (2008)	甲南大学に留学している 5 カ国の学生 35 名	「自己決定理論」に拠り分析した結果、留学半年を経て、1) 学習意欲の深化、2) 目標の具体化、3) 内面の成長が見られた。	半年の留学経験を通じて、自己決定の低い動機づけが 42.86 から 5.2% に減少し、自己決定度の高い動機づけが 57.14% から 94.8% に上昇した。半年後に、より自発的・自律的な動機に変容した。

3. 調査の概要

3.1. 調査対象者と調査時期

本研究の対象者は、甲南大学留学プログラム Year in Japan (YIJ) に 9 ヶ月間留学し日本で日本語、ビジネス、文学、宗教などのジャパNSTADIZ を学習する計 71 名の留学生⁷⁾と、カナダのビクトリア大学 English Language Centre, University of Victoria (ELC) の英語プログラムに 4 ヶ月以上留学し、カナダで英語を学習した留学生 103 名である。両大学のプログラムはいずれも短期留学生を受け入れるプログラムであり、学生は目標言語地域に在住しながら第二言語習得を目指してそれぞれ日本語と英語を学ぶ。さらに両者の共通点は、現地の母語話者との異文化接触を通じてコミュニケーションを行い、外国語を習得しようとするところにある。

上記日英語の調査対象者の国籍は以下の表 3 と 4 に、性別は以下の表 5 と 6 に示されておりである。国籍別・性別による日英語学習者の傾向については、ここでは特に言及しないが、留学・学習の動機と志向に関わる要素となるものと考えられ、今後の分析のために以下の表 3～6 を参考として挙げておく。

表 3 国籍別 (日本語学習)

国籍	人数	%	国籍	人数	%	国籍	人数	%	合計 (人数と%)
アメリカ	48	67.6	カナダ	6	8.45	韓国	3	4.2	71 名
イギリス	6	8.5	フランス	6	8.45	ドイツ	2	2.8	100%

表 4 国籍別 (英語学習)

国籍	人数	%	国籍	人数	%	国籍	人数	%	合計 (人数と%)
日本	36	35	サウジアラビア	3	2.9	カナダ	1	1	103 名
韓国	35	34	ヴェネズエラ	2	1.9	チベット	1	1	
台湾	5	4.9	スペイン	1	1	トルコ	1	1	

中国	4	3.9	ベルギー	1	1	欠損値	1	1	
メキシコ	4	3.9	タイ	1	1	システム 欠損値	7	6.5	100%

表5 性別（日本語学習者）

日本語学習者	性別	人数	%
	女	24	33.8
	男	47	66.2
	合計	71	100

表6 性別（英語学習者）

英語学習者	性別	人数	%
	女	60	58.3
	男	34	33
	無回答	2	1.9
	システム 欠損値	7	6.8
	合計	103	100

質問紙による調査の実施期間は、日本語については2006年10月に35名と2008年10月に36名の計71名に行い、英語については2008年1月に103名に調査を行った。面接調査は日本語が9月来日の半年後の2007年3月に20名、そして英語が2008年1月開講の半年後の7月に21名の学習者を対象に実施した。

3.2. 調査方法と分析

調査方法は、A) 質問紙調査と B) 半構造化による面接の二つである。質問紙調査は縫部他（1995）、李受香（2003）の質問紙を参考に、日本語31項目⁸⁾、英語が、時間を短縮してアンケートを実施する都合上、日本語の質問紙の31項目を規模縮小して盛り込んだ17項目⁹⁾から成る3件法で、両者共に英語による質問を行った。また B) 半構造的面接についてはいずれも11項目から成る質問¹⁰⁾に自由に答える形式であり、日本語学習者については日本語で、英語学習者については英語で面接を行った。面接回答は収録して文字化し、KJ法（川喜多1967）によりコーディングとラベル付けを行った。その際、各項目に複数の内容が認められる場合には複数の回答として処理したので、延べ回答数は日本語が97、英語が81の回答要素となった。

4. 結果と考察

A. 日本語と英語の留学の動機はどのように似てどのように異なるのか

4. A. 1. 日本語留学¹¹⁾の動機

質問紙調査で得た回答をSPSS17を用いた主成分分析・Kaiserの正規化を伴うバリマックス回転により因子分析を行った。回転後の成分行列において、日本語と英語の上位8因子（ α 係数：日本語0.878、英語0.706）を抽出し、それぞれ日英語学習者の留学についての結果を、日本語は表7のようにラベル化しまとめた。

表7 日本語留学の動機

抽出された因子項目	回転後の負荷量平方和		
	合計	分散の%	累積%
1)「日本語でコミュニケーション」・・・日本語で直接に情報を得たい, 日本語でメールや会話をしたい, 会話が上手になりたい, 文章を書きたい, 旅行がしたい	6.289	20.287	20.287
2)「日本人への理解」・・・親しい日本人とのコミュニケーション, 日本人の恋人や親族との相互理解, 周囲の人に自分を知ってもらう	2.48	8	28.287
3)「現代日本文化の享受」・・・漫画が読みたい, アニメが見たい, 映画・テレビがわかりたい, 歌詞を理解したい	2.416	7.792	36.079
4)「文化の興味から日本で生活したい」・・・日本を知って豊かに成りたい, 日本文化に興味がある	2.35	7.582	43.661
5)「アカデミックな達成」・・・日本語で良い成績を取りたい, 大学の単位に必要, 大学院などの上のコースに入る, 能力試験や留学試験に合格したい	2.124	6.852	50.513
6)「将来の経歴」・・・もうひとつの外国を勉強する, 将来の仕事に役立つ, 将来のいい経歴になるなど	2.093	6.753	57.266
7)「日本に長期滞在」・・・以前に観光で来た事がありもっと滞在したい, 以前に留学したことがあり再度留学したい	2.004	6.465	63.731
8)「日本音楽への興味」・・・日本語の歌を歌ったり楽器を演奏したりしたい, 歌詞を理解したい	1.893	6.107	69.838

4. A. 2. 英語留学の動機

英語留学の動機については、次表8のように上位8因子を主成分分析法により抽出し、結果を下表8のようにまとめた。上記の3.2.節で説明したように、質問紙調査において日本語の質問数が31項目なのに対し、英語の質問数を規模縮小して17項目としたため、因子により説明される分散の合計に差が生じる結果となってしまった。しかしながら、日英語学習者の留学動機を比較することを第一の目的と考える時、抽出された因子項目を上位からそれぞれ8項目取り上げることは比較上の意義があり、比較の目的は十分に果たし得ると考える。

表8 英語留学の動機

抽出された因子項目	合計	分散の%	累積%
1)「カナダで生活」・・・カナダに住む, カナダで仕事がしたい	1.874	17.037	17.037
2)「将来の仕事」・・・国で良い仕事を得る, 外国の会社で働く, 英会話の先生になる, 仕事の選択肢が広がる, 企業が国際化しているため共通語の英語が大切なため	1.599	14.535	31.573
3)「英語による教育を受ける」・・・英語圏の大学に入学, 国際ビジネスを学ぶ, カナダかアメリカでの学位の取得, 大学編入の英語スコアの取得	1.573	14.297	45.87

4)「教養ある人になる」・・・高い学問・芸術などを身につける, 西洋音楽と洋画の理解, 英語を教えるためには知識と能力が必要, 国際語だから	1.019	9.26	55.13
5)「カナダの文化と英語に興味」・・・多言語, 多文化政策に興味, アボリジニの文化に興味, 異文化理解, 環境が良い	1.007	9.153	64.283
6)「大学単位に必要」・・・卒論を英語で書く, TOEIC, TOEFLで高得点が必要, 英語が専攻, 自国では第二外国語が英語であり単位が必要, 専攻が英語コミュニケーション学のため	0.997	9.062	73.345
7)「自己を豊かにする」・・・外国人のためのボランティアをしたい, 外国人との交流, 外国旅行が好き	0.995	9.049	82.394
8)「高い教育を得る」・・・英語の講義の理解, 履歴書に書く, 英語を流暢に話す,	0.983	8.94	91.334

4. A. 3. 日英語学習者の留学動機の相違点

日本語の留学動機では、「日本語でコミュニケーション」が高い負荷量を示し第1因子となっている。また第2因子の「日本人への理解」、第3因子の「現代日本文化の享受」、第4因子の「文化の興味から日本で生活したい」、第8因子の「日本音楽への興味」と、全体的に日本の文化や日本人に対する関心が高い負荷量を示し、日本語学習者の留学動機には統合的志向が強く現れている。上記の表7の1)～4)と8)の統合的志向の項目は、非実用的、非実利的側面からの学習動機と言えるものである。前述の民族言語的バイタリティーに照応すると、「実用的価値が低い言語をわざわざ学習しようという人は、統合的動機が強い可能性が高く、その言語への純粋な興味を反映していると言える」（八島, 2004, 64）というバイタリティーの低い言語的特徴に合致している。

上記の1)～4)と8)の因子を累積すると、日本語主成分因子全体の49.77%となり、日本語留学の動機の半分以上を統合的志向が占めていることになる。さらに、因子7)の「日本に長期滞在」も統合的志向と見做すなら、その累積合計は56.23%に達する。しかし、因子7)の動機が単に長期に滞在することへの希望である可能性もありこの因子が、長期滞在の理由については不明瞭な点で、統合的志向の一つに入れられるかどうかは判然としない。また、因子5の「アカデミックな達成」、因子6の「将来の経歴」は道具的志向に該当し、その累積合計は13.61%を占めている。

一方、英語の動機では、第一因子が「カナダで生活」、第2因子が「将来の仕事」、第3因子が「英語による教育を受ける」の順で高い負荷量を示し、これらはいずれも道具的志向である。英語留学動機の第1因子から第3因子までの累積は45.87%を占めている。英語留学動機の4)と5)に示す因子を除き、6)の「大学単位に必要」も道具的志向に該当するので、6)の因子を含めると累積合計は63.87%に達する。いずれも実用的・実利的で道具的かつ将来の実現に具体性がある道具的志向であり、その累積合計は英語の留学動機の6割を超している。

以上の点において、英語は民族言語的バイタリティーの強い言語に相当し、「実用的価値が高い傾向にあり学習意欲がおこりやすい」という八島(2004, 64)の記述に該当する。反面、英語留学動機には「4) 教養ある人になる」「5) カナダの文化に興味」「7) 自己を豊かにする」という統合的志向の因子も見られ、その累積は27.46%を占めている。

4. A. 4. 統合的志向の日本語と道具的志向の英語

Francis & Ryan (1998, 26) によれば、「統合的動機対道具的動機という観点は第二言語習得における両極端な相反する (ambivalent) 価値や態度を表し、前者は第二言語と文化に対して肯定的かつ部分的に同化する姿勢であり、後者は学習者の功利的な姿勢を表す」という指摘である。

日英語の留学動機を比較すると、4.A.1節と4.A.2節で見たように、日本語では「日本語によるコミュニケーション」、「日本人への理解」、「日本文化への関心」という因子項目から、典型的な「統合的志向」の特徴を示し、英語の示す「道具的志向」の割合の高さと比べると対比的である。両者の対比的な相違は、下表9のように、日英語の統合的・道具的志向の割合に拠り、数字で示され、中でも、英語の道具的志向が際立って高いことが認められる。

表9 日英語の統合的志向と道具的志向の割合の比較

	統合的志向の占める割合	道具的志向の占める割合
日本語	49.77%	13.61%
英語	27.46%	63.87%

上記のような日英語の留学動機の相違は何に由来するのだろうか。それは、英語が世界共通語としての地位を持つ言語であり、日本語が世界の一つの地域語であるということに拠る。

日英語学習者の留学動機の比較において、日本語にのみ特定し英語にはないという留学動機が存在する。その動機とは、具体的には次章の表10に例を挙げるが、日本という地域性を特徴とし、日本の地域性に根ざし形成された文化的意味空間¹²⁾に留学する学習者の動機である。またその意味空間の文化的実践者(箕浦, 1998, 131)である日本語話者とのコミュニケーションを目的とする動機である。

4. A. 5. 日本語だけに特定される留学動機と英語だけに特定される留学動機

日本語学習者20人と英語学習者21人に留学動機についての半構造的面接を行った。面接の対象者の国別内訳と人数は表10のように示される。

表10 日英語留学動機についての面接の対象者

	韓国	日本	中国	台湾	チベット	トルコ	サウジアラビア	アメリカ	カナダ	メキシコ	イギリス	フランス	スペイン	ベルギー	合計
日本語学習者	1名							12名	2名		2名	3名			20名
英語学習者	6名	5名	2名	1名	1名	1名	2名			1名			1名	1名	21名

その結果、以下の表11と12に示されるように、それぞれの言語に特定した留学の動機が見出された。

表11 日本語だけに特定される留学動機（＝英語には見られない動機）

1) 継承語としての日本語の学習・・・日系人だから、親族と日本語で話したいから、日本で生まれたので日本人としてのアイデンティティがある、両親の国を知りたい、等
2) 日本の文化と生活が知りたい・・・日本のアニメやテレビを日本語で理解したい、漢字の勉強が好きだから、和食を毎日食べたいから、日本映画に興味があるから、子どもの時からの日本への関心のため、等
3) 将来、日本に住みたい・・・日本で仕事をしたい、日本人と結婚したい、等
4) アジア圏の国とアジア言語に対する関心・・・自分はアジア系なので日本では差別を感じないし居場所がある、アメリカに留学したがアメリカ文化がしんどい、アジア系には日本語の方が英語よりやさしい、等
5) 研究対象が日本である

表12 英語だけに特定される留学動機（＝日本語には見られない動機）

1) 英語を使う仕事・・・英語ができれば自国でいい仕事を得られる、英語ができれば世界中で働ける、英語圏での職業が得られる、等
2) 英語圏の大学に入学・・・講義が英語で行われる、入学のために英語のスコアが必要、等
3) 英語は世界の共通語・・・英語は世界中の人とのコミュニケーションの手段
4) 英語能力の向上・・・英語のスキルアップのため、TOEICやTOEFLの受験、等
5) 英語の勉強が好き・・・英語をもっと勉強したい、等

上記の表が示すように、日本語だけに特定される動機からは、留学先を日本地域に限定し日本語と日本語話者と直接接触することを条件に、上記の表11の1)～5)を総合して、日本語が①個人的な理由と関心から学習したい言語、②日本の文化を経験しながら習得する言語、③学習者のアイデンティティを求めるために必要な言語、という①～③の三つの特徴的要素が指摘される。

他方、英語では、①（英語圏であればよいという意味で）第二言語文化・話者を一つの地域に特定しない言語、②国際的に共通な言語手段として学ぶべき言語、学ぶ必要がある言語、

③世界中で生活手段となり糧となり得る実利的な言語，という特徴的要素が見出される。

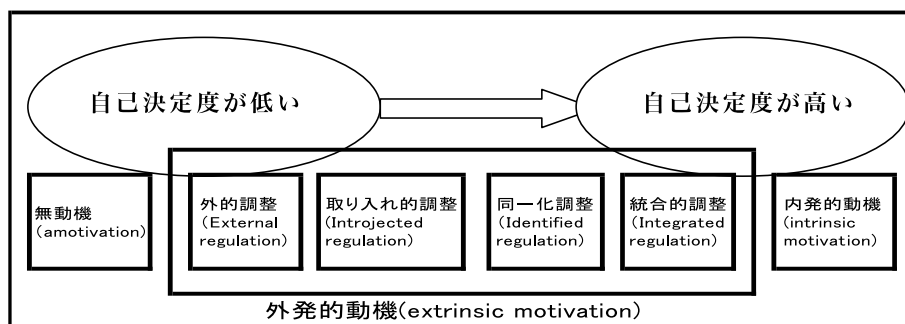
日本語留学は日本という場所に限定したものであり，日本という地域性に基づく動機である。その点では，日本及び日本語に固有なものである。しかし，この固有性は，世界の各地域が固有の言語と文化を持つという点で，同時に世界での普遍的な意義を持っている。「統合的志向」の特徴は，第二言語文化や話者との直接接触が学習者の意欲や態度にもたらす影響が大きいということにある。しかしながら，時としては，日本語留学動機の第3因子「現代日本文化の享受」に見られるように，地域性に依存しながらもそれを抜け出してアニメや漫画に代表されるポップカルチャーとして，世界の若者に日本語留学を動機づける普遍的メッセージを持ち，地域性から世界共通の普遍的存在に至るような「統合的志向」が，日本語留学の動機には見られるという事実と，それが21世紀では地域と世界を結ぶ接点の一つとなり得るという現状をも指摘しておきたいと考える。

他方，英語の「道具的志向」は，学習者の第二言語文化や話者への態度による影響が少ない。その意味から，英語の留学動機では，話者・文化の地域性は日本語のように限定的に求められず，英語の使用地域であればどこでもよいという留学地の選定傾向がある。文化的には地域の固有性にこだわらないという傾向が見られるのである。換言すれば，中立性，一般性，汎用性という志向の傾向が英語留学の動機にはあると言える。従って，統合的志向と地域性，固有性が日本語留学の特徴となり，道具的志向と非地域性，中立性，一般性，汎用性が英語留学の特徴となると言える。

B. 自己決定理論（SDT）の枠組みにおいて，日英語の留学経験は動機づけのプロセスモデルにどのように反映しているのか

4. B. 1. 自己決定度における日英語の比較

自己決定理論（SDT）とは，人が自己の行動の決定にどのように関与するのか，行動は自己選択か，外部からの選択かあるいは内部からの選択か，といった問いに関わる理論である。



Deci & Ryan (1985, 2002) は，人が活動に対して内発的に動機づけられるプロセスを上記の図のようにモデル化し，自己決定度の高いものから低いものまでを，「無動機，外発的動機，内発的動機」の連続体として段階的に示した。さらに，「外発的動機」を自己決定度の低い

ものから高いものへと「外的調整，取り入れ的調整，同一化調整，統合的調整」の4つの段階に分けて考え，そのプロセスモデルを上記のように図示した。

また，SDTでは，人は三つの心理的欲求である自律性，自己効力感，他者との関係性を求め，この三つの心理的欲求を充足する時に，最も自己決定的な行動が起こるとしている。Deci & Ryan (2002)によれば，SDTのオリジナリティは，これらの三つの心理的欲求が人間の全ての成長に向けての生得的な傾向性であり，これらの心理的欲求が同時に満たされるような条件のもとで，人は意欲的になりパーソナリティが統合的に発達するのだと主張している点にある。

本論では，日本語20名と英語21名の留学生を対象に，留学半年を経た後の「留学動機の変化について」，面接による調査を行った。面接は，日本またはカナダにきた時点と半年後の面接時点では，留学の動機にどんな変化があったかという質問内容を中心に，11項目の半構造的な方法により行なわれた。そしてその結果について，KJ法により分析を行ったところ，日本語からは97，英語からは81の回答要素が抽出された。その要素を自己決定理論の枠組みにあてはめて分類した。そして，自己決定度の低いものから高いものへと「外的調整，取り入れ的調整，同一化調整，統合的調整」の4つの段階にグループ分けし，日本語を表12に，英語を表13のようにまとめた。

表13 SDT に拠る日本語学習者の留学半年後の留学動機の分類

	回答内容	回答数	小計	%
外的調整	A) 学習意欲の停滞を招いた	5	5	5.2
取り入れ的調整	B) 留学は義務なので学習意欲には影響しない	8	8	8.2
同一化調整	C) これまでの学習成果が確認できた	14	71	73.2
	D) 学習意欲がさらに向上した	33		
	E) 自己の努力の再評価—このままではもったいない	3		
	F) 将来の仕事と生活が具体化した	10		
	G) 今後の学習意欲が具体化した	11		
統合的調整	H) 内面の変化や成長があった	13	13	13.4
合 計			97	100

「外的調整」とは最も他律的な状態で，自己決定の度合いが低く，外部からやらされて行動をしている状態である。表13と14に示されるように，日本語学習者5.2%，英語学習者13.58%で英語の方が「外的調整」の割合が高く，自己決定度が低い。「取り入れ的調整」とは，課題の価値は認め，自己の価値観として取り入れつつあるものの，まだ「しなくてはいけない」といった義務的な感覚を持っている状態であり，日本語学習者8.2%，英語学習者3.7%で日本語学習者の方が「取り入れ的調整」の度合いが高く自己決定度が低い。上述の「外的調整」と「取り入れ的調整」はどちらも他律的，外発的な段階にあり，日本語学習者が計

13.4%，英語学習者が計17.28%で，この段階では英語学習者の方が他律的・外発的で自己決定度が低い段階にあることがわかる。

表14 SDTに拠る英語学習者の留学半年後の留学動機の分類

回答内容		回答数	小計	%
外的調整	A) いい仕事を得るために必要だと思う	7	11	13.58
	B) 父の考えに従っている	1		
	C) 留学でようやく勉強するようになった	1		
	D) 大学に行くために必要だと思う	2		
取り入れ的調整	A) 英語は大切だと思っている	1	3	3.70
	B) 自分は英語が好きだと思う	1		
	C) 自分や他者からの承認が得られると思う	1		
同一化調整	A) 学習成果が向上した	22	48	59.26
	B) 学習意欲が向上した	11		
	C) 学習目的が具体化した	11		
	D) 将来の仕事と生活が具体化した	4		
統合的調整	A) 自律性が高まった	5	19	23.46
	B) 人間的成長があった	14		
合 計			81	100.00

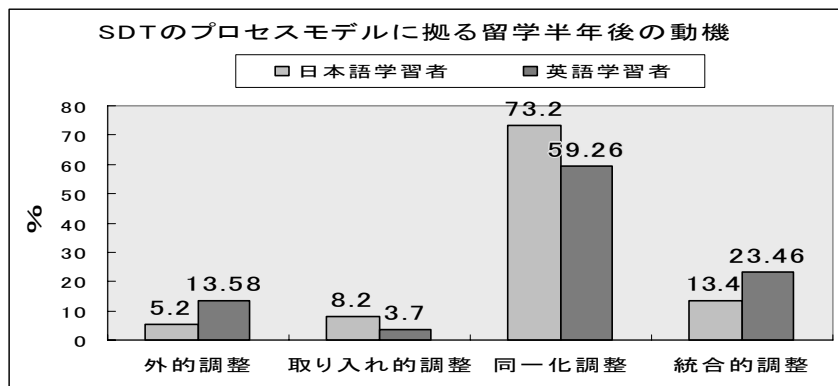
「同一化調整」とは，行動の持つ価値の重要さが認識され，「重要だから」やるといった積極的な理由へと変わる段階であり，日本語学習者73.2%，英語学習者59.26%で日本語学習者の方が「同一化調整」の度合いが高く，日本語学習者の方が自己決定度が高いことを示している。しかし，両者ともに「同一化調整」が50%を超えてかなり高い水準にあることは認められる。

「統合的調整」とは，他の価値観と対立しない自己と融合した価値観を持つようになる段階であり，自らやりたくてそれを行うものである。この段階では，日本語学習者13.4%，英語学習者23.46%で，英語学習者の方が「統合的調整」の度合いが高い。

「同一化調整」から「統合的調整」への過程において自己決定度が高まるにつれ，自律性，自己効力感，他者との関係性の欲求が強まり内発的となるが，日英語学習者の「同一化調整」と「統合的調整」を合わせると，日本語学習者が86.6%，英語学習者が82.7%と日本語学習者の方がやや度合いの高いことがわかる。しかしその差は僅かである。

上記のSDTのプロセスモデルに拠る段階別の日英語学習者の割合は，下記「STDのプロセスモデルに拠る留学半年後の動機」のようにグラフに示される。

下記のプロセスモデルが示すグラフは，総合的に見て本論の調査では，日英語共に，半年後には自己決定度の度合いが高まっており，留学経験により日英語学習者の動機は内発的に向かい，留学が第二言語学習に効果的に影響していることを示している。



5. 留学生のコメントに見られる自己形成の様相

上掲の表13と14の留学生のコメントから、「今後の学習目的が具体化した」、「将来の仕事と生活が具体化した」、「内面の変化や成長があった」という留学生の自己省察が見られ、留学動機は留学半年を経て、①学習意欲の深化、②目標の具体化、③人間的成長という変容をもたらしている。今回、紙幅の関係で詳述はできないものの¹³⁾、留学半年後の面接調査では、「親から離れても外国で生活できる自分を発見」、「学習効果が出てきて自信がついてきた」という自律性や有能感、「日本滞在の間に日本人に対する感情が変化した」という他者との関係性に対する変化が自己形成に関するコメントとして見い出された。

箕浦（1998, 138-139）は、「高校・大学時代に最も多い文化間移動の形態は留学」であり、異文化滞在を扱った文献レビューから、青年期の異文化滞在の成果として次の①～⑤の5項目、すなわち、①受け入れ文化への好意的客観的態度、②より広い世界観、③自民族中心傾向やステレオタイプの低減、④物事の複雑さへの認識と自己覚知の拡大、⑤自文化への尊重、を挙げている。以上の留学成果の①～⑤は、本論において、日本語の留学動機の8因子を来日の理由とし、その後の留学期間の半年を経て、留学生がSDTのプロセスの中で段階的に獲得していく成果と重なっている。一例を挙げて示すなら、インターネットを通じて日本の歌手に魅了された韓国人の留学生が、その歌手の歌う歌詞の日本語の意味が知りたいばかりに日本語の勉強を始め、その歌手の住む日本についてもっと知りたいという願望を一つの留学動機として日本に留学した。来日以前に留学していた米国では、自己の英語能力に劣等感を抱き、米国でのアジア人に対する偏見に悩んでいたが、そのような自分を振り切るためにも、周囲の勧めもあり自らにも課して、日本へ留学することによって家族から離れて自分だけの生活をしてみることを決意した。日本留学によって、日本人との直接の接触を通じて自分の日本語能力に自信がつき、日本のホストファミリーや友人から好意的に遇せられる内に、それまでの韓国人という民族的意識の殻から、より広い世界観をもち得るようになった。日本語による自己表現力をさらに身に付けて、自分や自文化のことをもっと日本の人たちに理解

してもらいたい、またともすればこれまでは自己防御から結果を心配して行動できなかった自分であるが、まずは実行して、その上で結果を見てみようとするだけの自律性と有能性を留学滞在の生活の中で次第に克ち得ていった。これらの自信は日本で育んだ他者との関係性の中から、より強固なものとなった。以上の留学生の自己形成の過程は、この留学生が日本語学習の中でのSDTの外発的動機の諸段階を経て内発的動機に向かうプロセスと重なり、内面的変化や成長の過程を示すものとなっている。

言語と文化とは、福田（1955）によれば、「言葉は文化のための道具ではなく、文化そのものであり、私たちの主体そのものである」と言う。甲南大学への留学生を事例として考えるなら、留学生は教室で日本語を学習しながらホームステイで日常的に日本語を使い生活し、日本人の友人とのつきあい、クラブ活動、地域の人たちとの交流を通じて、日本語による対人コミュニケーションの方法を学んでいく。ホストファミリーの正月料理に込められた家内安全や子孫繁栄の謂われの説明を聞きながら、ホスト家族と共に正月料理を食べ、元々は神様に供えられた料理を今一緒に食べているのだから「身が引き締まる」のだという説明に、「身が引き締まる」という日本語を鸚鵡返しに呟く留学生から、異なる文化の含蓄に触れた人間の緊張と感銘と学びの経験が感知される。

箕浦（1984）は異文化とその人々との接触について、「人間は意味を求める動物であり、文化はそれぞれの意味を持つ。人間は他者との相互作用を通じて体験に意味を付与し、シンボルの世界を獲得する。」と指摘し、さらに箕浦（1998, 131）では、異文化接触体験が人間形成に与える影響について、「異文化との接触で、当たり前と思っていたことが、当たり前でない世界があることを知って、初めて自分がどのような意味の世界に住んでいたかに気づく。このような経験が心的世界の再編成を促し、人間形成に資する」と述べている。

自文化の中では、言葉の意味と行動が不可分に結びついているため、行動に伴って生起する感情と背後にある文化的意味との関係を問うことはない。言葉と文化的意味は無意識の内に一体化して使用される。Anderson, J.E.とTaylor, E.W.（1994）は、異文化接触体験を「移行体験（transition experience）」、「変容体験（transformation）」として自己変革の過程と捉えている。上述のように、異文化接触過程は、留学生がホスト文化を学習し適切な行動が取れるように、第二言語話者との対人行動を通じて習得する過程であると捉えられる。このような異文化接触過程と自己形成に関し、小柳（2006）は「異文化体験者（留学生）はホスト社会の人々との交流を通して、ホスト社会の文化規範を「このようなものだ」と自分なりに解釈し、それに対する自分の関わり方や態度を決めながら自己認識を形成していく。その過程に自己形成がある」と述べている。

6. 日英語の留学コンセプト

八島（2001）は「様々な国や地域における民族言語的な環境（ethnolinguistic environment）

はそれぞれ異なるので、その地域の環境と密接に結びついた学習理由(オリエンテーション)というものを操作的に定義すべきというClement & Kruidenier (1983) の指摘は示唆に富んでいる。」として、八島 (2000) において、日本人の大学生の英語学習理由を「国際的志向性」というコンセプトにより提示した。「国際的志向性」は、異文化コミュニケーションを目的とした英語学習理由であり、国際的な仕事をしたり、異文化の人々と接触するといった行動様式を統合したものであり、日本のEFLの状況からのコンセプトである。

本論において、カナダ英語留学について、そのコンセプトを問うなら、前述の3章の表4「国籍別 (英語学習)」が示すように、カナダへの英語留学者の国籍は13カ国に及んでいるのであり、世界各地からの留学生を結びつける英語留学理由として、英語留学動機の8因子である1)「カナダで生活」、2)「将来の仕事」、3)「英語による教育を受ける」、4)「教養ある人になる」、5)「カナダの文化と英語に興味」、6)「大学単位に必要」、7)「自己を豊かにする」、8)「高い教育を得る」の、道具的志向傾向を特徴にした本論での考察経過に拠り、英語留学のコンセプトは「国際的コミュニケーション能力養成への志向」とであると指摘できる。

また、日本語留学のコンセプトについては、3章の表3「国籍別 (日本語学習)」が示すように、日本語留学生は欧米を中心とする6カ国の学生が世界各地から日本の甲南大学へ留学しているのであり、米国の大学から日本へと二重に留学している韓国の学生3人を含めた学生の日本語留学理由として、日本語留学動機の8因子である1)「日本語でコミュニケーション」、2)「日本人への理解」、3)「現代日本文化の享受」、4)「文化の興味から日本で生活したい」、5)「アカデミックな達成」、6)「将来の経歴」、7)「日本に長期滞在」、8)「日本音楽への興味」、に基づいて、統合的志向の傾向を特徴にした本論での考察経過に拠り、そのコンセプトは「日本語による対人関係と文化的意味空間の形成への志向」と指摘できる。

7. 終わりに

日英語の留学動機、留学動機のコンセプト、留学半年後の動機、について表にまとめると下表15のようになる。

表15 まとめ 日英語学習者の留学の動機、留学動機のコンセプト及び留学半年後の留学動機

	留学の動機	留学動機のコンセプト	留学半年後の留学動機
日本語	統合的志向が まさる	日本語による対人関係と 文化的意味空間の形成へ の志向	留学経験により、共に、自己決定度 の度合いが高まり、かつ内発的に向 かい、留学が第二言語学習と自己形 成に効果的に影響する
英 語	道具的志向が まさる	国際的コミュニケーション 能力養成への志向	

日本語留学は日本という特定の地域に限定して留学し、留学生が自文化と母言語を背景に日本語話者との相互作用を通じて、文化的意味空間を自己決定的に摂取していく過程であると捉えられる。しかし、日本語留学のコンセプトは、一方では、日本という地域・民族・環境という特殊性を持ちながら、他方では、それぞれの国にはそれぞれの地域性、特殊性があるという意味で、どの国にも地域にも該当する普遍性を持つ。今後、多くの人が日本に留学したいという動機を持つためには、世界の人々にアピールし世界の人と共有できる普遍的なメッセージを日本が発信することが、日本語留学動機の広がり増大への鍵となるであろう。

英語においては、世界中どこでも通用する「国際的コミュニケーション能力の養成」としての普遍性を目指して、外延的に動機が広まる方向を目指す傾向にある。それとは対照的に、日本語のような地域語、現地語は内包的な普遍性を目指すという意味で、両者の向かうベクトルは反対方向にあると言える。

注

- 1) World Englishesという言葉は、Kachru (1982, 1984) が言語学的英語そのものとイデオロギーの伝達手段としての使用を区別するために用いた用語である。特定の母語話者に結びついたものではなく、国際言語としてlingua francaとして機能していると見做される英語を指す。
- 2) 水村は、〈普遍語〉とは、〈書き言葉〉と〈話し言葉〉のちがいをもっとも本質的に表す(水村, 2008)ものだという。21世紀に入り、伝達手段の発達、特にインターネットの技術が英語を〈普遍語〉にしつつあると述べている。(水村, 2008, 49, 239)
- 3) 「21世紀日本の構想」は、1999年小渕恵三内閣総理大臣の下で、21世紀における日本のあるべき姿を検討するために設けられた懇談会である。
- 4) 本論において、留学とは、第2言語学習のため、他国に3ヶ月以上住んで学習することを言う。
- 5) H.Gilesらは、元々は、一国における異なる民族間で使用される言語の持つ力を民族言語的バイタリティーとして概念化した。
- 6) Gardner & Lambert (1959, 1972) では、“orientation” がいわゆる動機を示し、“motivation” は学習意欲を表している。
- 7) 本論で言う“留学生”とは、海外の大学や専門学校等の高等教育機関に在学する者を指す。
- 8) 付録1を参照
- 9) 付録2を参照
- 10) 付録3を参照
- 11) 本論では、これ以降、日本語留学は日本への留学を意味し、英語留学は、カナダを主とする英語圏への留学を意味する。両留学共に、第二言語と文化習得のための留学を意味する。
- 12) 箕浦 (1984, 44) は、文化をその成員の体験に意味を付与する枠組みとし、そのような意味づけの枠組みの内包を“意味空間”と呼んでいる。
- 13) 「日本語学習」と「留学動機」の関わり及び留学過程の動機の変化については、原田 (2008) を参照

引用文献

Anderson, L.E. (1994). A new look at an old construct Cross-cultural adaptation. *International Journal of Intercultural*

- Relations*, 18, 293-328.
- Deci, E.L. & Ryan, R.M. (1985). *Intrinsic Motivation and Self-determination in Human Behavior*, New York: Plenum.
- Deci, E.L. & Ryan, R.M. (1991). A motivational approach to self: Integration in personality. In R.Dienstbier (Ed.) *Nebraska symposium on motivation: Perspectives on motivation*, Vol.38, pp.237-288. Lincoln, NE: University of Nebraska Press.
- Deci, E.L. & Ryan, R.M. (2002). *Handbook of Self-determination Research*, Rochester, NY: University of Rochester Press.
- 福田恒存 (1955). 『文化とは何か』 創元社
- Gardner, R.C. & Lambert, W.E. (1959). Motivational variables in second language acquisition, *Canadian Journal of Psychology*, 13, 266-272.
- Gardner, R.C & Lambert, W.E. (1972). *Attitudes and motivation in second language learning*, Rowley, MA: Newbury House.
- Gardner, R. C. (1991). Attitudes and Motivation in Second Language Learning, Reynolds A. G. (Eds.) *Bilingualism, Multiculturalism, and Second Language Learning*, Lawrence Erlbaum Associates, 43-68
- Giles, H., Bourhis, R.Y., & Taylor, D.M. (1977). Towards a theory of language in ethnic group relations, *Language, Ethnicity, and Intergroup Relations*. 307-348. London: Academic press.
- 原田登美 (2008). 留学経験は学習動機にいかに関わっているか—「自己決定理論」に拠る「甲南大学Year in Japanプログラム留学生」の留学と日本語学習の動機の変化— 甲南大学国際言語文化センター紀要『言語と文化』, 12, 151-171.
- Kachru, Braj, ed. (1982). *The Other Tongue: English across Cultures*. Urbana: University of Illinois Press.
- Kachru, Braj, ed. (1984). World Englishes and the Teaching of Non Native Speakers. *TESOL Newsletter* 8, 25-26.
- 郭俊海・大北葉子 (2001). シンガポール華人大学生の日本語学習の動機づけについて『日本語教育』110, 130-139.
- 川喜多二郎 (1967). 『発想法—創造性開発のために』 中公新書
- 小柳志津 (2006). 『感情心理学からの文化接触研究—在豪日本人留学生と在日アジア系留学生との面接から—』 風間書房
- 倉八順子 (1992). 日本語学習者の動機に関する調査—動機と文化的背景の関連—『日本語学』77, 129-141.
- 水村美苗 (2008). 『日本語が亡びるとき—英語の世紀の中で』 筑摩書房
- 箕浦康子 (1984). 『子どもの異文化体験』 改訂3版 新思索社
- 箕浦康子 (1998). 異文化体験と人間形成 佐伯胖他 (編) 『岩波講座11 現代の教育国際化時代の教育』 岩波書店 127-14
- 守谷智美 (2004). 日本語学習の動機づけに関する探索的研究—学習成果の原因帰属を手がかりとして—『日本語教育』120, 73-82.
- 中野敦 (2003). 日本語学習動機と英語学習動機の比較調査—韓国の大学生の場合—『日本語学研究』8, 57-69
- 成田高宏 (1998). 日本語学習動機と成績との関係: タイの大学生の場合『世界の日本語教育』8, 1-11.
- 縫部義憲・狩野不二夫・伊藤克浩 (1995). 大学生の日本語学習動機に関する国勢調査—ニュージーランドの場合—『日本語教育』86, 162-72.
- Norbert Francis & Phylis M.Ryan (1998). English as an International Language of prestige: Conflicting Cultural Perspectives and Shifting Ethnolinguistic Loyalties, *Anthropology & Education Quarterly*, 29, 25-43.
- 李受香 (2003). 第2言語および外国語としての日本語学習者における動機づけの比較—韓国人日本語学習者

を対象として『世界の日本語教育』13, 75-92.

高岸雅子 (2000). 留学経験が日本語学習動機におよぼす影響—米国人短期留学生の場合—『日本語教育』105, 101-110.

Taylor, E. W. (1994). A learning model for becoming intercultural competent. *International Journal of Intercultural Relations*, 18, 389-408.

Yashima, T. (2000). Orientations and Motivation in foreign language learning: A study of Japanese college students, *JACET Bulletin*, 31, 121-133.

八島智子 (2001). 「国際的志向性」と英語学習モチベーション—異文化間コミュニケーションの観点から— 関西大学 外国語研究, 1, 33-47.

八島智子 (2004). 『外国語コミュニケーションの情意と動機』 関西大学出版

付録1 質問紙：日本語学習者の留学動機についての調査

Questionnaire About Your Motivation for Studying Abroad in Japan and Learning Japanese

The purpose of this survey is to discover your motivation for studying Japanese in Japan for better planning of our course curriculum in the future.

Please write your age, sex, major, and the length of the time that you have been studying Japanese in the space below.

Age (), Sex (), Major (),
Nationality (), month (s) / () year (s)

Please select the suitable answer and circle it after you read each question. You may write additional comments if needed or asked.

Using the scale from 1 through 3, answer the following questions.

1 = very much 2 = a little 3 = not at all

You are currently studying Japanese in Japan because you...

- | | | | |
|--|---|---|---|
| 1. want to be able to read Japanese comics | 1 | 2 | 3 |
| 2. want to be able to watch Japanese anime | 1 | 2 | 3 |
| 3. want to be able to understand Japanese songs | 1 | 2 | 3 |
| 4. want to be able to sing Japanese songs and play some instruments | 1 | 2 | 3 |
| 5. want to be able to watch Japanese movies and TV programs and to listen to Japanese radio | 1 | 2 | 3 |
| 6. want to be able to read Japanese magazines, newspapers, and novels | 1 | 2 | 3 |
| 7. want to be able to collect information on your own interests and be able to join extracurricular activities | 1 | 2 | 3 |
| 8. want to be able to write in Japanese | 1 | 2 | 3 |
| 9. want to be able to travel in Japan | 1 | 2 | 3 |
| 10. want to be able to converse with speakers of Japanese | 1 | 2 | 3 |
| 11. want to be able to exchange e-mails and letters with Japanese friends | 1 | 2 | 3 |

- | | | | |
|---|---|---|---|
| 12. want to be able to better communicate with Japanese boyfriend (s) /girlfriend (s) | 1 | 2 | 3 |
| 13. want to be able to communicate with Japanese relatives | 1 | 2 | 3 |
| 14. are interested in Japan and its culture | 1 | 2 | 3 |
| 15. want to be able to enrich yourself by understanding Japan and its culture | 1 | 2 | 3 |
| 16. have wanted to stay longer in Japan ever since you visited Japan last time as a tourist | 1 | 2 | 3 |

If you answered 1 or 2 to Q16, please write (a) how many times you had visited, (b) how long you stayed each time, and (c) your experience in Japan at the time(s) of your visit(s) .

- (a)
(b)
(c)

- | | | | |
|---|---|---|---|
| 17. have wanted to study abroad in Japan again ever since when you did so the last time | 1 | 2 | 3 |
|---|---|---|---|

If you answered 1 or 2 to Q17, please write in the space below (a) when, (b) where, (c) how long, and (d) what for.

- (a)
(b)
(c)
(d)

- | | | | |
|--|---|---|---|
| 18. want to improve speaking skills | 1 | 2 | 3 |
| 19. need language credits for college | 1 | 2 | 3 |
| 20. want to receive a good grade in Japanese class | 1 | 2 | 3 |
| 21. want to pass standardized exams (e.g., Japanese Language Proficiency Test) | 1 | 2 | 3 |
| 22. need to learn Japanese in order to take higher education and/or specialized courses | 1 | 2 | 3 |
| 23. want to take an internship in Japan | 1 | 2 | 3 |
| 24. think that the language will be useful in your future career | 1 | 2 | 3 |
| 25. think that studying abroad can be an asset in your credentials | 1 | 2 | 3 |
| 26. want to study another foreign language | 1 | 2 | 3 |
| 27. want to live in Japan in the future | 1 | 2 | 3 |
| 28. want to work in Japan in the future | 1 | 2 | 3 |
| 29. need to use the language as a means for communicating
with boyfriend (s)/girlfriend (s) and his/her family. | 1 | 2 | 3 |
| 30. want to receive praise from parents and other members of society | 1 | 2 | 3 |
| 31. think that acquiring Japanese is necessary for becoming an international person | 1 | 2 | 3 |

付録2 質問紙：英語学習者の留学動機についての調査

Questionnaire

Your Motivation for Studying English in Canada

The purpose of this survey is to discover your motivation for studying English in Canada.

Please write your age, sex, nationality, most recent ELPI Class # and how long have you been studying in the ELPI in the space below.

Age (), Sex (), Nationality (),
 most recent ELPI Class # (),
 how long have you been studying in the ELPI ? () month (s) / () year (s)

Please select the suitable answer and circle it after you read each question. Using the scale from 1 through 3, answer the following questions.

1 = very much 2 = a little 3 = not at all

You are currently or have been studying English in Canada
 because you...

- | | | | |
|---|---|---|---|
| 1. want to be able to understand Canadian songs and play some instruments | 1 | 2 | 3 |
| 2. want to be able to watch Canadian movies and TV programs and listen to radio | 1 | 2 | 3 |
| 3. want to be able to read Canadian magazines, newspapers, and novels | 1 | 2 | 3 |
| 4. want to be able to write in English | 1 | 2 | 3 |
| 5. want to be able to travel in Canada | 1 | 2 | 3 |
| 6. want to be able to converse with speakers of Canadians | 1 | 2 | 3 |
| 7. are interested in Canada and its culture | 1 | 2 | 3 |
| 8. want to live in Canada in the future | 1 | 2 | 3 |

If you answered 1 or 2 to Q7, please write in the space below what for.

- | | | | |
|---|---|---|---|
| 9. need to learn English in order to go to University or College in English | 1 | 2 | 3 |
| 10. need to learn English that will be useful in my future career | 1 | 2 | 3 |
| 11. need to learn English in order to get a good job in my country | 1 | 2 | 3 |

If you answered 1 or 2 to Q11, please write in the space below why do
 you think English is required to get a good job in your country.

- | | | | |
|--|---|---|---|
| 12. want to work in Canada in the future | 1 | 2 | 3 |
|--|---|---|---|

If you answered 1 or 2 to Q12, please write in the space below what for.

- | | | | |
|---|---|---|---|
| 13. want to improve English skills in order to teach English | 1 | 2 | 3 |
| 14. need language credits for college or university | 1 | 2 | 3 |
| 15. want to be able to enrich yourself by understanding English | 1 | 2 | 3 |
| 16. want to study another foreign language | 1 | 2 | 3 |
| 17. need to learn English in order to get higher education | 1 | 2 | 3 |

If you have any other reasons to study English in Canada, please write them in the space below.

付録3 インタビューの質問項目：日本語（英語）学習者の留学動機の変化についての調査

1. どのような動機や目的で日本語（英語）の学習を始めたのか。
2. なぜ日本（カナダ）に留学したいと考えたのか。
3. 日本（カナダ）に来た時点と（インタビュー時点の）現在では、日本語（英語）学習に関して、動機について何か変化があったか。
4. 変化があったならどのような変化か。
5. 留学して日本語（英語）学習の動機は高くなったか。低くなったか。
どのように高くなったか。どのように低くなったか。
6. 上記の5の質問で、学習動機を最も高めたものは何か。低めたものは何か。
7. 今回、日本（カナダ）に来て、現在までの滞在中に日本語（英語）をもっと勉強したいと思ったことがあるか。どんな時にそう思ったか。
8. 今回、日本（カナダ）に来て、現在までの滞在中に日本語（英語）の勉強がいやになったことがあるか。どんな時にいやになったか。
9. 将来、日本語（英語）の学習を続けようと思うか。それはどうしてか。
10. 将来の自分の進路と現在の日本語（英語）学習は関連しているか。どのように関連しているか。
11. 現在、日本（カナダ）と日本人（カナダ人）に対してどのような感情や印象を持っているか。